

聖太祖アウラアム

明治四十四年六月
新刊



狂者のクアサ



020927-000-8

特29-218

聖太祖アウラアム

水島 行揚/著

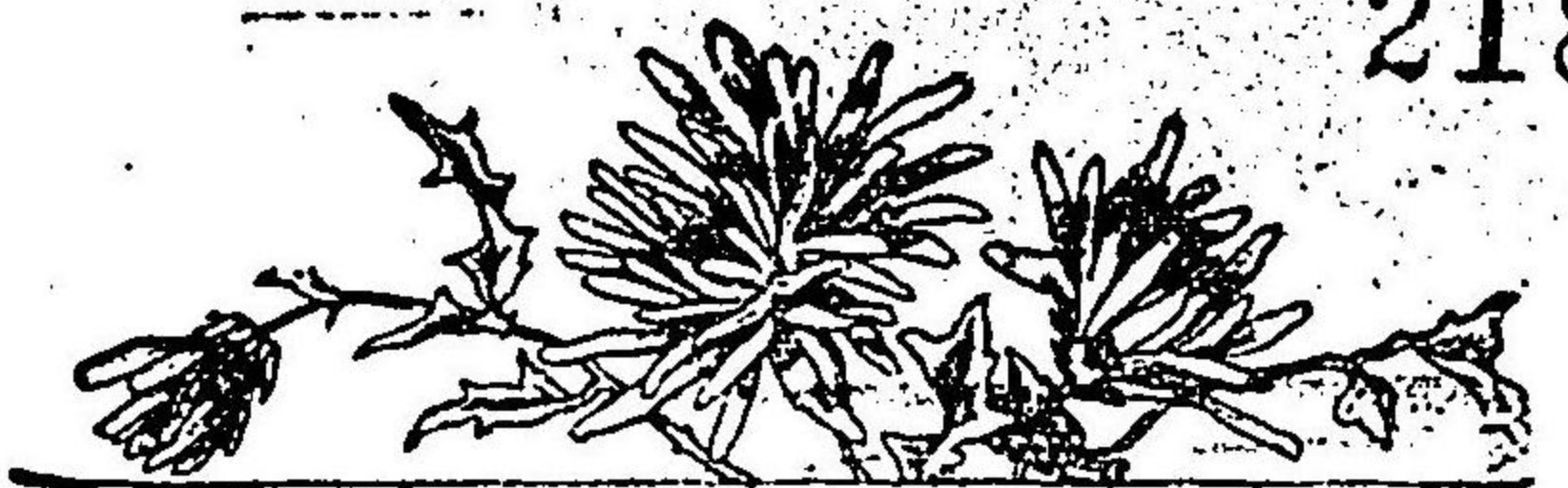
M43

ABI-0776



特 29

218



年十百九千一 年三十四治明

聖
太祖
ア
ウ
ラ
ア
ム

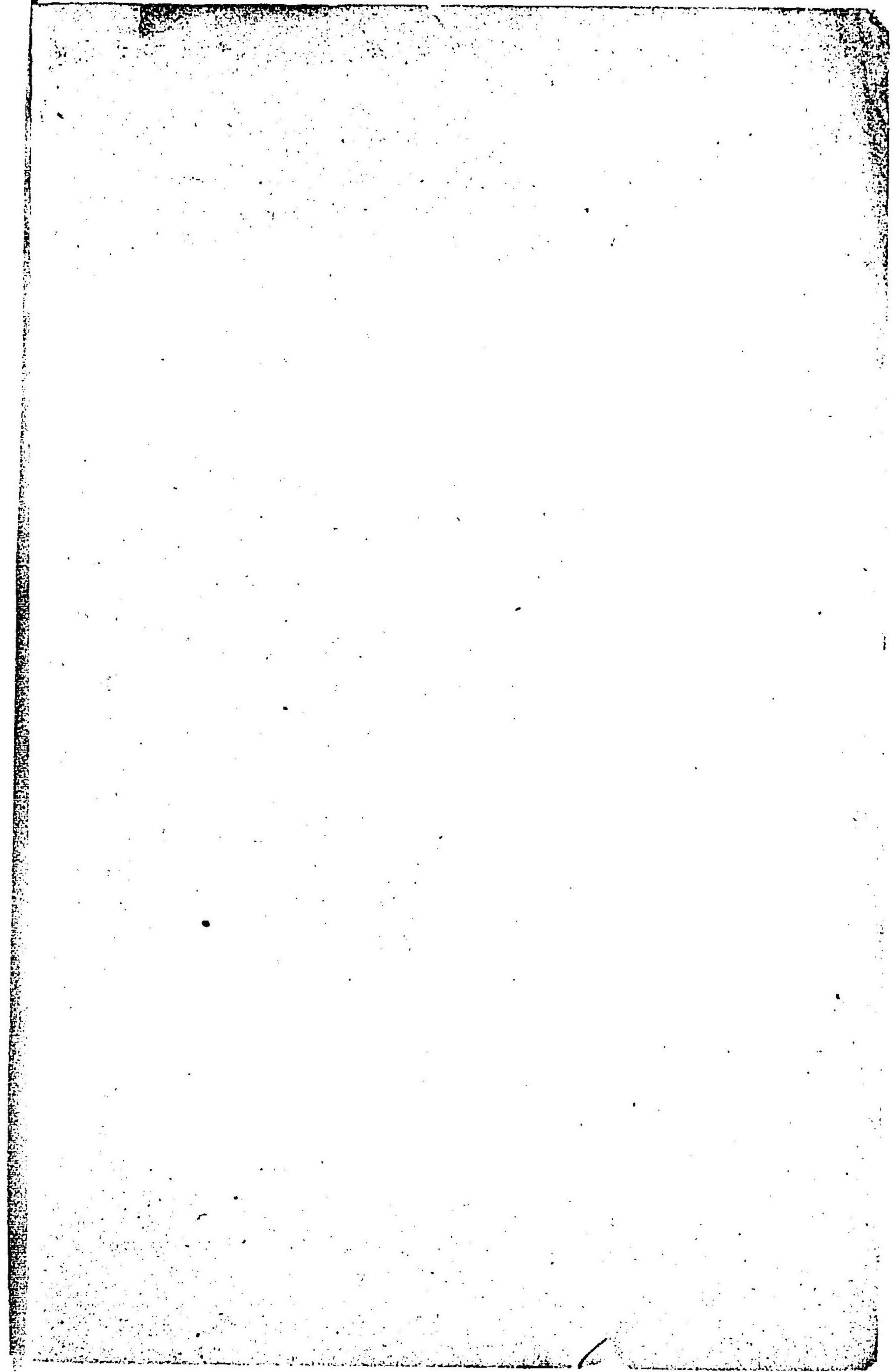
京 東

行 刊 所 輯 編 會 本 教 正



目次

一。	太祖 <small>たいそ</small> アウラムの移住 <small>いぢゆう</small> 。	頁數 一
二。	無慾 <small>むよく</small> 。	六
三。	義勇 <small>ぎゆう</small> 。	十
四。	慰安 <small>いあん</small> 。	十七
五。	改名 <small>かいかい</small> 。	二十一
六。	聖三者 <small>せいさんしや</small> 。	二十五
七。	哀願 <small>あいがん</small> 。	二十九
八。	ソドム、ゴモラの天罰 <small>てんばつ</small> 。	三十三



欠

MISSING

目次

一。	太祖 アウラムの移住。	一
二。	無慾。	六
三。	義勇。	十
四。	慰安。	十七
五。	改名。	二十一
六。	聖三者。	二十五
七。	哀願。	二十九
八。	ソドム、ゴモラの天罰。	三十三

- 九。嗣子。……………四十三
- 十。イサアクの献祭。……………四十八
- 十一。サルラの埋葬。……………五十六
- 十二。イサアクの婚配。……………六十
- 十三。アウラアムの眠り。……………七十二



繪人正敎
家庭讀本

太祖 アウラアムの畧傳

一。アウラムの移住。

みな
皆 様は舊約の諸聖人の中で太祖聖アウラアムの名はよく御存じてしやう。聖書に彼の事を讚て『信仰ニ由リテアウラアムハ嗣業トシテ受ケントスル地ニ往クベキ召ニ違ヒ、自ラ何ニ往クヲ知ラズシテ往ケリ』と曰てあります(エウレイ十一ノ八)。昔から、今まで類稀なる信仰と敬虔と従順を以て、澤山の聖人義人の中に一番耀いて居るのは、實に太祖アウラアムであります。故に私は茲に親愛なるハ

太祖アウラアム

リストス 正教會の少年少女皆さんの爲めに、少しく此の大なる義人の物語を致さうと思ひます。アウラム 初めの名はアウラムで、アラムと云ふ人の弟でありました。彼は何事に限らず常に深く上帝様を頼んだ人であります。其れは彼が後年移住生活をなす時に、最も著しく顯はれて居ります。

丁度アウラムが七十五歳の時でした、七十五と申します、我國では、齡古稀に達したと云ふて大抵の人は御隠居様で、先づ何事も爲さぬものが多い様です。けれども爾時にアウラムは上帝様から斯様なお諭を受けました、「爾は故



大祖アウラム

土を出て、爾の親戚に別れ、父の家を離れて、我が爾に示さんとする地に至れ」と。如何に上帝のお諭しとは云へ、此様なお言に一寸の猶豫もせず直ちに従ふものがありましやうか、先づ普通の人情から云ふと、年を取りて白髪の老人になつた上

に、懐かしい朋友や親類どもに別れ、今迄幾年も住み慣れた故郷を去りて、知らぬ他國に往く事は、なかく出来難い事でありませす。然るにアウラムは如何でしやう、往く先きが如何様な所か、少しもわからぬし、自分は年が寄つて、その上、文明人が住んで居るか、野蠻人が暴れて居るか、熊が居るか、虎が出るかも知れない外國へ向つて、多くの親類朋友らと離れ、只父のフアラと妻のサラヤ、甥のロト等を引連れ、ハルデヤのウルと云ふ故郷を後にして、はる／＼と、知らぬ他國に旅立つたのであります。而して南の方へ／＼と段々進み、斯て夫昔、元祖 アダム エワが住ん

てゐた所のエテムの樂園に程近きエフラト河と云ふ清流を渡りて、夫れより途を少しく西南に取り、ハナアンと云ふ地に至りました。それから此地を周遊して、モレの櫛樹と云ふ有名な大木の葉陰に旅の疲勞を息めました。時に神様から此土地を御前の子孫に賜はるとの、いとも芽出度い御約束を得たのであります。但此途中メソポタミヤのハルランと云ふ邑に着た時、アウラムの父が死にました。如何に義人と雖も、親が死んだと云ふ一生の大事故に付ては悲しかつたに相違ありません、けれども此れとても、皆大權者なる上帝の聖旨に因るこそですから、

アウラムは、心に上帝のいごかしこき聖旨を悟りて彼を讃揚げたことだらうと思はれます。

二. 無慾。

義なるアウラムは既にハナアンの地に往き、北の方に進んでウエフリと云ふ所に、着きました。固より勤勉の人でありますから、朝は星を戴いて、野面に稼ぎ、夕は月を踏んで、家畜に水飼ふと云ふ有様で、雨が降らうが、風が吹かうが、暑からうが、寒からうが、その様な事には少しの厭いもなく、働きました。而して彼れの日課は實に祈禱と

労働(即ち信仰と善行)より外は何物もありません。世の人の様に、貴重の月日を遊興に費すなど云ふ事は、露程もありませんでした。従つて幾年も経たない中に、非常に、家畜などが殖えて忽ち大金持となりました。その時に甥のロトも能く稼ぎましたから、同じく間もなく、立派な財産家となりました。然ども、幸か、不幸か、兩人の財産が斯様に殖え、牛や羊や馬や駱駝なども、段々と殖えて参りました。爲め、自然と場所が狭くて、置き處も無い様になつて、到底何時までも一處に居ること云ふ事が出来なくなりしました。それに、アウ

ラムの牧者とロトの牧者とは、牧場の事に就て、屢々争論しました。時にロトは自分の牧者に加勢をなして、之を辯護しましたから、アウラムはロトに向ツて申しますには「御前と私は、最初から極親しい睦じい親族である、叔父甥の間柄である、決して少しの事で、彼れ是れと争論ふては人間の倫道にも戻る、上帝様の前にも罪を得る、されば愛するロトよ」視よ、地は爾の前にあり、爾は隨意に撰んで、我を離れよ、爾若し左に往かば、我は右に往かん、爾若し右せば、我は左せん」と。するとロトは遠慮なく、其邊の豊かな良い土地を選びました。そこでアウラ

ムは、自分で豊饒なる肥沃た土地を去りて、凶悪なる他の瘦せた地に往きました。

嗚呼、アウラムの心懸は、何んぞ清い麗はしい事ではありませんか、善い無慾な心懸ではありませんか。世には随分少許の慾の爲めに、目に角立て、親兄弟も争ひ、所謂「金に親子はない」といふ俚言を實行し、妻子親類も争ふ様な、人面獸心の人々が、少くないが、此等は實に人として、耻づ可き行爲であります。これをアウラムの優美い心と比較たならば、如何様でしやう。彼は實に信仰の模範たる如く、又無慾と愛の模範であります。

三、義勇。

甥なま ロトは、アウラムより 實じつに 寛大かんたいな 難有ありがたい 御言葉おことばを 頂いたき
 ましたから、早速さつそく 自分じぶんの 住すむ 土地とちを 撰えらびました。其その 土地とち
 は、シツテムと申もうして、絶えず イオルダン河かはの 水灌みづぎ、其その
 上うへ、ソドム、ゴモラと云ふ二つの、繁華はんくわな 市まちも あり、澤山たくさん
 の 脂穴あぶらあななども ある 頗すこる 物産ぶつさんに 富とんだ 眺望ちやうぼうの よい 溪谷たにで
 ありました。けれども 此この 土地とちを 撰えらぶ 時とき、ロトは 一圖いちずに 其その
 地ちの 美うまはしい 事ことばかりに 目めを 注つけて、此地このちに 住すんで 居をる
 人間じんげんが、悪い 習慣しゅうかんや 深かい 罪つみに 染そまツて 居をる 事ことや、又また 至し

極ごく 凶惡きやうあくな 恐おそる 可べき 人物じんぶつであると 云いふ 事ことには、少せしも 注ちゆう
 意いしませんで した。されば ロトは、アウラムと 別わかれて から
 間まもなく、忽たちまち 非常ひじょうな 災難さいなんに 遭あひました。
 それは ロトが、今度こんど 住居すまいとして、新あらたに 撰えらんだ シツテム
 の 溪たにの 王達おうたちは、(當時 シツテム溪はゴモラアダマセオイム) 従來これまで 十
 二年ねんの間、隣國りんごくなる エラム王おう(ホドルロゴモルと云ふ人ひと)の
 權威けんいに 服従したがツて、毎年まいとし 滯とどまらず、貢物みつぎものを 納おさめて 居をりましたが、
 ロトが 此地このちに 移うつつた年としには、遂々とうじく エラムに 背そむいて、之これを 納おさ
 めませんでした。故ゆゑに エラムの 王おうは、大おほに 怒いかりて 他たの 諸王しよわう
 (セナール、エラツサル、ゴイムなど)と 同盟どうめいし、澤たく

山の兵隊を率ひ來つて、襲撃しましたから、ソドム、ゴモラの王は、シッテムの谷の一戦に、痛く敗北して、その残兵は山に逃れ、谷に陥り、又は逃げ損じて、此附近に數多くある脂油坑に落ちて、無慘の最後を遂げた者も、澤山ありました。そして、エラム王は、意外の大勝利を得て、ソドムゴモラの町の、有りと有ゆる目ぼしき財寶や、夥しい糧食を奪ひ取つた許りでなく、婦女子に至るまで、數多の人々を、捕虜となし、凱歌を擧げつゝ、北に向つて去りました。ロトも、此時此災禍を免るゝ違なく、財寶は奪はれ、妻子も自分も、耻辱と苦痛とを甘んぜねばならぬ悲しい捕



太祖アウラム

虜の身さはなりました。然るに斯の災難を免れたる或る一人がアウラム、當時マムリーの檜の木の下に住んでゐた所の叔父に、此事を注進いたしました。すると何事にも義を見て勇むアウラムは、一寸の猶豫もあらばこそ、直に一方に

は、己の諸僕の中から最も勇悍なる者、三百十八人を募り、一方には、アモレヤ人、マムリイ及び、其二人の兄弟に説き、之を兵を合せ、疾風の如く、敵を追躡けて、ダンといふ地に至り、こゝに兵を分ち、暗夜に乗じて、四方から不意撃を致しました。されば今迄勝ち誇つたるエラムの將卒も、今は義人の銳き其鋒尖に當り難く、遂に大に狼狽へ、掠奪した金銀財寶、婦女子、捕虜は申すに及ばず、ロトご其家族並に其財産をも打棄て、もう斯うなれば逃けるが勝ちやと曰て逃げ去りました。是に於てロトも家族も、全く屈辱を免れたのみならず、其財産をも、無事に

恢復する事が出来ました。是れ實にアウラムの義勇の絶倫て居つた爲めです。さればアウラムの凱旋して即ち戦地から引揚げる時、諸邑の王達は皆アウラムを徳として、其身自ら出で、嚴かに之を歓迎致しました。就中サリムの王メルヒセデクと云ふ者、神の祭司で有た人は、パンと葡萄酒とを携へて之を出迎へ、厚くアウラムを祝福しました。よりにアウラムも又、己が獲た所の十分の一を之に贈りて、深く上帝に感謝の意を表はしました。その時ソドム王は俗に王の谷と稱ぶ所にアウラムを出迎へて求めますには「爾の奪ひ還せし我が國の捕虜のみ

余に與へんには、爾の回復したる財寶、即ち最初我國の有に屬せしものは、皆悉く之を爾に獻らん」と申しました。然るにアウラム答へて「我れ至上き神に誓つて一條絲、一本の履帶たりとも、爾に屬する者は、一切取らじ」と申しました。それで折角武力に由て奪ひ還せし囚虜と財寶を皆悉くソドム王に與へました。此れはアウラムは、實に他人の財産を奪ふて己を富ませるを最も不義の事と認めてゐたからです、實に義人の義なる所以であります。茲に世の人の慾張はみツともない者ですが、アウラムの無慾澹泊は誠に立派な者だと云ふとも認められます。

四。慰安。

凱凱者は何處にも尊ばれませんが、殊に大なる義人アウラムは強敵エラム王の軍を破つて以來、アウラムの名聲は、ハナアンの全地に轟きました。従つて彼れの名譽を嫉み、或は之を危懼く思ふ者もあり



太祖アウラム

ました。爲めにアウラム自身も、痛く此事を憂へました。
 所に主上帝は一夜、異象の中に現はれて仰せ出されまし
 た、「アウラムよ、懼るゝ勿れ、我は爾の楯なり、爾は大なる
 賚を得んとす」と。アウラムは答へて「主よ、我は年老いて、未
 だ子なし、ダマスクの人エレアザルは我が嗣子たり、爾
 は何を以て我に大なる賚を賜はんとするか」と申しま
 した。
 時に主更に諭して、「爾の嗣業者はエレアザルに非ずして
 爾の實子なり」と仰せられ、畢りて、アウラムを戸外に導
 き、天を指し目を舉げさせて仰せらるゝやう「爾は彼の星

を數へ得るか、爾の子孫は、此星の如く夥しく繁榮えん」と
 預言されました。そこでアウラムは深く此慰安を得た
 ことを悦び、主の聖言を厚く信じ、約束の印として、古の
 盟約者の例に倣ひ、翌日主の命に従ひ、年の三つになる
 牝牛と、牝山羊と牡羊を屠り、之を正中から割きて、相對
 はじめ、山鳩と雛鳩をも之に加へ、各々正中から切割さ
 たる生物の間を通過りて、此生物が前に一の生活物た
 りしが如く、爾の子孫も亦一心一靈となる時あらんと
 の意なる盟約の禮を執行しました。その時、日は全く西
 の山の端に没し、四面晦冥となりました。然るに奇なる哉

丁度 爐から出る様な烟と火焰とは、何處からか現はれて
 切り割いた生物の中間を通過りました。是れ實に後年主
 イ、ス、ハリストスが、聖アウラムの後裔として世に降り、
 幾多の憂悲患難の晦冥の中から喜びの光明となりて、私共、
 多くの罪ある人々を御救贖ひ下さる尊き御約束の預象で
 ありました。

此日 又主 上帝は アウラムに、其子孫に エギベトの ニル河
 以北、エフラト河に至るまでの地を嗣業地として、與へんご
 の盟約を賜はりました。爲めにアウラムは、重ねく幸福を
 受る身となりました。太祖 アウラムが 斯様な幸福を御受

けなされたのは、何故でしやう、外ではありません、常に厚
 く眞の主 上帝を信仰したが爲めであります。聖書に所
 謂「信仰ニ由リテ、彼ハ 許約ノ地ニ在リテ、已レニ屬セザ
 ル地ニ於ケルガ如ク、イサアク及ビイアコフ、即チ同一
 ノ許約ヲ同ジク 嗣グ者ト 偕ニ 慕ニ 居リタリ、蓋シ 彼ハ
 基アル城、上帝ノ營ニ造ル者ヲ 俟テリ」云ふ御言に應ず
 る者であります(エウレイ十)。

五. 改名

太祖 アウラムが 先に ハナアンに 移住して から、もう二十四

年も経ちましたけれども、まだ子がありませんでした。而して彼は既に九十九の高齡に達しましたが、主上帝は之に現はれて仰せられました「爾、我が前に、善を行ふべし、我爾と永遠の約を結ばん、爾に衆多の子孫を賜はん」と。アウラムは此聲を聞き、崇敬、服従の心禁へ難く、自然と頸を垂れました。時に主は又仰せられました「アウラム(高貴なる父の意)よ、爾の名は今よりアウラム(衆多の民の父の意)と改む可し。蓋は我爾をして多くの民の父とならしめん、諸民諸王は皆爾より出で、ハナアンの全地を領し、之を統轄むべし、且つ我は爾と爾の子孫との上帝となりて永遠に爾等を

守護らん。故にその約束の見る可き徴として、爾等の中の男子は皆割禮を行ふべし。凡そ男兒は生れて八日目に至らば割禮を行へ。之を行はざる者は、我が約に背く者、我民と交際す可からざるもの、我と親與なき者、我の祝福なき者なり」と。又仰せらるゝには「爾の妻サラ(我女主の意)も、今より宜しくサルラ(衆多の母の意)と、改名むべし。我は彼を祝福し、彼に子を賜はん、諸民と諸王は彼より出てん」と。アウラム之を聞き、衷心より喜悅に堪へませんでした。又竊かに思ふ様、我は九十九歳、我妻サルラは九十歳、此様な老翁老媪になつて、どうして子を生む事が出来やうか

ご疑ひ、笑ひましたから、主はアウラアムの疑を解き、必ずその妻サルラが、子を生むを確め給ひ、其子生るれば、イサアク(晒笑ふの意)と名づけよと命じて、久方の雲井はるかに見えなくなられました。そこでアウラアムは己の疑ひまことたことを深く悔いまして、直に上帝様の命を奉り、自ら其身に割禮を行ひ、又妾腹アガリから生れた十三才の幼童なるイズマイル、並に己が諸僕、異邦から購ふた奴隷に至るまで、残らず割禮を行ひました。此割禮と申すは、男子の身體の一部分に施す式でありまして、新約に於ける洗禮機密の預象であります。昔し割禮を受けぬ人は、如

何に高位高官の人でも、英雄でも、豪傑でも、上帝の撰民となる事が出来ませんでした。今は洗禮が其通りで、如何に智者達者でも、學者でも、金持でも、洗禮を受けない者は上帝の救贖に與る事が出来ませんのです。ハリストス救世主が、『人ハ水ト禱ニ因リテ、生ル、ニアラザレバ上帝ノ國ニ入ルヲ得ズ』と仰せられた通りであります(イオアン三の五)

六。 聖三者。

其から數日の後、日中の炎熱餘りに酷い日でした、太祖は暫時其處の、天幕の入口に座して居ましたが、偶々三人

の旅客が、遙かに立つのを見ました。元來情深いアウラムの事ですから、嘸かし此の暑さに、旅客方は、種々な難儀を爲したのであらうと思ひ遣り、忽ち趨り出て、之を迎へ、地に俯伏して、其中の長者に向ひ「我主よ、我若し爾の恩を蒙らば、請ふ爾の僕の前を通過する勿れ、願はくは我をして少許の水を取り來りて爾の足を濯はしめよ、爾は此樹の下に休憩へよ、我はパンを取り來りて、爾等の旅途の疲を愈さんと申しました。三人の旅客はアウラムの懇切なる衷情に應じて、快よく之を諾ひました。さればアウラムは大に悦び急ぎて、己が幕の内に入り、



大前アウラム

妻をして速に粉を練りて淡きパンを焼かしめ、自らは更に趨りて家畜の群に至り、肥えたる犢を撰び、小童をして之を屠り、速かに調理せしめ、既にしたから、アウラム手づから牛酪と牛乳とを携へ來りて、客の前に供へ

ました。客は座して食ひ、アウラアムは其側に立ちて、厚く之を饗應しました。此時客の一人はアウラアムに向ひ「來年爾の妻サルラは子を生まんと云ひました。時にサルラは、天幕の入口の隙間から、此言葉を漏れ聞き、竊かに晒ふて思ひました」妾は此様に年若い、我夫も亦老衰してゐる、如何して斯様な慰藉があらうか」と。そこで旅人はアウラアムに向つてサルラの言葉を詰る様に「サルラよ、何爲れぞ爾等の中に子の生るゝを疑ふや、主は全能の上帝なり、老者にも亦能く子を賜ふを知らざるか」と申されました。之を聞てアウラアムは益々旅人が尋常人でな

くて、上帝であることを悟りました。サルラも亦大に恐れ、遽かに戸を閉ぢ、其笑ひを紛らさうと致しました。けれども人心の奥底までも洞察す所の上帝は早くも、サルラの笑ふたことを御存じでしたから、深く後來を警め、今後は唯々として能く上帝の命に従ふ可きことをお諭しになりました。アウラアムは旅人等が食卓を離れて起ち去る時、大に感謝し、恭しく別意を表し途中まで態々之を見送つて往きました。此三人は實に至聖三者たる上帝でありました。

七. 哀願

途すがら上帝は、アウラムに仰せられました『我豈に我が爲さんとする事を爾に隠さんや、今ソドム、ゴモラの罪甚だ重く（自ら天性を汚して敬神の念更になく）我れ罰を以て之に應報いんとす、もごより我は仁慈なれば、彼等の悔改めて、正に反るを望む、由りて今、彼等の大惡にして到底改善の見込なく、そが罰の期を猶豫するは、却りて危険なるや、否やを見んとす』と。斯くて二人の天使は、旅人の姿狀のまゝにて、ソドムに趣きました。此時、アウラ

ラムの甥ロトは家族と共に相變らずソドムに住んで居りました。之が爲めにアウラムは、上帝に向ツて幾度か切に邪なる事を行へる市を憐まん事を願ひました、其言に『主よ、爾は義者と不義者を共に滅ぼし給ふにや、此市中に五十人の義人あらば彼らの爲めに此地を恕し給はざるや』と。主の御答に『我は公義の審判者なり、彼處に五十人の義人あらば、其人々の爲めに、彼の全邑を恕さん』と。アウラムは再び『我は主の前に塵と灰の如き者なれども、敢て威尊を冒瀆し主に問はん、『五十人の義人中、五人を缺かば、それが爲めに、爾は全邑を滅ぼし給ふや。』主

の宣ふには『四十五人を得ば、我は滅ぼさざる可し。』アウラムは又申しました『四十人の義人あらば如何。』主の宣ふには『四十人を得ば、滅ぼさざる可し。』アウラムは又『主よ請ふ我を怒り給ふ勿れ、彼處に三十人の義人あらば、如何。』主の宣ふには『三十人の義人あらば、滅ぼさざる可し。』アウラム又求むるには『二十人の義人あらば如何。』主の宣ふには『二十人の義人あらば、亦滅ぼさざる可し。』アウラムは又『請ふ主よ、怒らずして、今一度言はしめ給へ、若し彼處に十人の義人あらば如何。』主の宣ふには『十人の義人あらば此邑を滅ぼさざる可し』と、因りてアウラム心に思ふ

様 ソドムの如き 大邑中に 十人位の 義人はあるだらうと。 奇異 非常なる 願求の 談話は 茲に 畢りました。かくて 主の 天使は 去り、アウラムは 己が 住居に 歸りました。 あはれ 我が 甥を 慮かる アウラムの 友愛は 如何に 深い こととて じやう、その 熱心は 如何に 大なることと じやう。我等 も 此様に 他人の 幸福を 慮り、 常に 慈悲と 熱心とを 以て 他人の 爲に 友愛と 同情を 有たなくては なりません。

八. ソドム、ゴモラの 天罰。

夕暮頃、二の天使は ソドムに 至りました時、ロトは 邑の 門

の側に座し、旅人を勞はらんご彼方此方を打ち観ツてゐ
 ましたが、適々二人の旅客を見出しましたから、起て之
 に近き地に俯伏して『我が主よ、請ふ、爾の僕の家に入り
 足を濯ひて宿り、明朝旅途に上り給へ』と。二天使はロト
 の招待が單に敬禮のお世辭でなくて、其衷心から旅人を
 款待ものなるや否やを顯はさうと思ひまして申しました
 『否我儕は街衢に宿らんのみ』と。然るに、ロトの招待が甚
 た熱切でしたから、遂に其家に至りて宿りました。ロトは
 大に悦び、急いで淡きパンを焼き、之を饗應しました。二
 天使は之を食べて、未だ臥床に就かない間に、姦悪なる



大觀アウラム

ソドム人は老少となく
 邑の四方から群り來ま
 して、ロトの家を圍み、
 ロトを呼んで申します
 には『今宵宿ツた旅人を
 早く我等に出で渡せよ』
 と呶鳴りました。彼は外
 に出て戸を閉ぢ、人々
 に向ツて答へました『兄
 弟よ、請ふ悪を爲す勿

れ、二旅人は安全なる避所を求めんとして我が屋蓋の下
 に來れり、我は客を出して爾等の凶殺に委するよりは
 寧ろ我が二人の處女を出して汝等の辱むるに任せん』
 と。然るに慾の爲に本心を失へる没道漢なるソドム人は
 大聲にロトを罵り、怒號して曰ふ様『汝は外來人なるに我
 等に命令せんとするか、實に不届至極の奴と云ふ可きて
 ある、宜しく之をも併せて遣付てしまへ』と。早くも手を
 かけロトを寸斷にせんと致しました。そこで二客は急ぎ
 戸を開きロトを扶け入れて、固く戸を閉ぢました。然るに
 猛り狂へる暴戾のソドム人は、進んで其戸を破り、其家宅

に闖入りて暴れ廻らうと致しましたから、二人の客即ち
 天使は大に怒りて暴民の罪を懲罰し、悉く其目を眩まし
 てしまひましたから、一人も能く戸口を探し當る者が
 ありませんでした。その時天使はロトに問ふて申しました
 『爾の親戚は尙ほ此邑中に幾人あるか、此邑に居る者は
 悉く之を導いて、速に此邑から出せよ、我儕は此邑を滅
 ぼさんとす、其は此邑の罪惡號呼て、主に達し主は我儕
 を遣はして之を滅ぼさしむるなり』と。所でロトには二
 人の女子がありまして、皆已に許嫁の夫を有てゐました
 から、ロトはその夫即ち女婿の許に至りて『上帝が此邑を

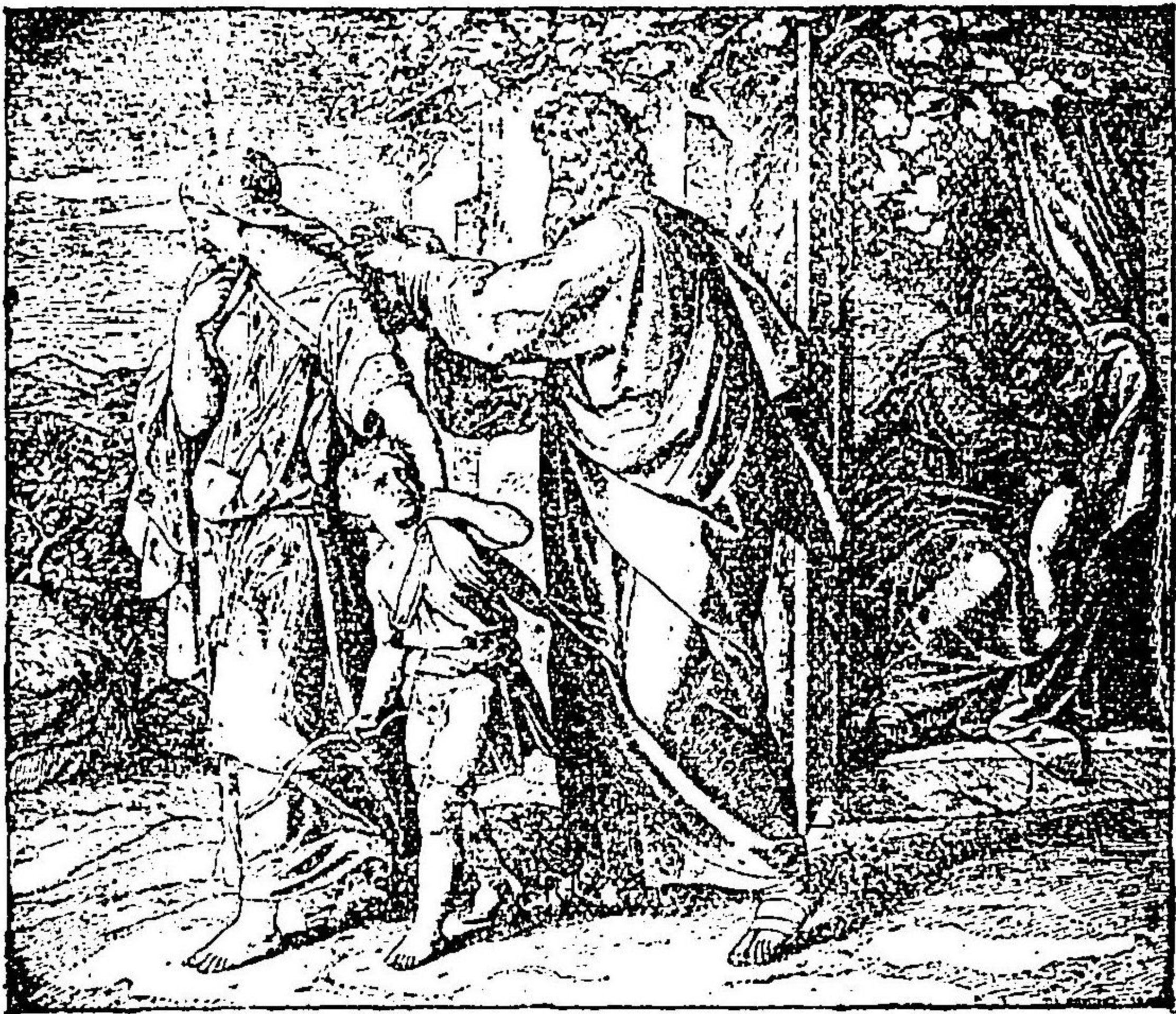
滅さんとするが故に速かに邑外に去れ」と勧めました。けれども女婿等は、之を戲言だらうと謂て、少しも之を信じませんでした。既にして夜明に近づきましたから、二天使はロトを促して速かに其妻と二女を携へて邑を出て迫り來れる天災を免る可きを諭しました。此時、彼は躊躇ひましたから、二天使の一はロトと其妻及二女の手を取つて邑外に導き出し、且つ之に戒めて申しました『爾逃れて己の生命を救へ、決して後を回顧る勿れ、又決して此平原に止まる勿れ、宜しく山に遁れて、滅亡を免れよ』と。ロトは之を聞き、大に憂ひ嘆願して申

します『主よ、我は今山に遁れて災を避くるに違あらざれば、彼處の小さな邑に避けしめよ、而して彼の小さな邑を矜恤めよ』と。天使は彼れの請を納れて、彼の邑を滅さないことを約束しましたから、彼は急いで彼の小さな邑に往きました(此邑は後にシゴルと名づけられました)。丁度其邑に達した時、今しも赫々たる太陽は、東天に昇り、下界を光照よご見る間もあらばこそ、一天遽かにかき曇り、天より硫黄と火が雨霞の如く打降りて、さしにも榮えしソドム、ゴモラと其他同類の諸邑と平原と住民と、他の動物植物に至るまでを倏ちにして悉く燦滅してしまひまし

た。是時、ロトの妻は、天使の命令を守らずして後を回顧みて、家に歸りて或財物を取らうとの慾望を起しましたので、忽ち化して鹽柱と爲りました。實に上帝の義罰は、恐ろしい者ではありませんか。其からアウラムは、此日朝早く起きて前日上帝と談話した處に往て、遙かにソドム、ゴモラの平原を眺めました所が、朦々たる黒烟が爐の烟の如くに上騰りシテムの溪谷は荒れ果て、淡黒き油の湖を現出しイオルダン河より此湖に入り来る所の魚は皆死んでしまふと云ふ、悽絶の有様を見ました。後世此湖を死海と名けて上帝の義罰不敬虔の者に天罰の

恐る可き永世の印といたされました。嗚呼、此様な恐ろしい天罰の中からロトが救はれましたのは、アウラムの代求めたのに因る所が多いのであります。聖書にも『義者の熱切なる祈禱は多くの力あり』(イアコフ公)と申して、義人の祈禱の力あることを證して在ります。故に諸子も祈禱の時には、朝に晩に父母、兄弟、姉妹、親戚、朋友の爲め、國家と皇帝と司祭、教師及び恩人らの爲めには申すに及ばず、異教人の爲めには上帝の救を信ずる様代求め、殊に聖人義人の祈禱を恃まなくてはなりません。

又ソドム、ゴモラが斯くも物凄く亡びたのは深く罪惡に溺れたが爲めてあります。人も罪惡に溺れて、不義不法なことばかり致しますれば、何時かは盜賊の來る如く、上帝審判者は不意に來りて其靈身共に破滅の不幸に陥ります。故に諸子は常に不義を戒め、善い心懸を持つ可きであります。又ロトの妻が聞くも慄とする鹽柱となつたのは上帝の命令に叛き、無暗に慾張つた爲めてあります。世の中に上帝の仰せに背きて慾張る程、罪の上には愚かなことは他にありません。



祖ツラアム

九。嗣子。

ソドムの平原から立騰る烟と臭氣とはアウラムの住居する地にも蔓延して來ましたから、彼はマムレの檉樹の下を去りてエギベトの境なるフリステヤの邑に往いて茲に止まり

ました。此時上帝の預言が應じてアウラアムが百歳サルラは九十歳で玉の様な一子が生まれました。是れ即ちイサク(喜悅の笑の意)であります。アウラアムは主の誠命に基きて八日に至り其子に割禮を行ひました。其後イサクが成長して、漸く母の懷を離れる様になりましたが、父母の悦びは例ふるに物なく、之が爲めにいと盛なる賀筵を設けました。然るに妾腹なるイズマイルは、イサクを侮りて屢々嘲りましたから、本妻のサルラは大に怒りて、夫に訴へて、アガリと其子イズマイルを、放逐する事を求めました。されどアウラアムは、イズマイルも亦己が

寵愛する子なるを以て、此訴を聞き、痛く一家の不和合を悲みました。時に上帝はアウラアムに諭して仰せられました。

『イズマイルと其母の爲めに悲む勿れ、サルラの請ふ所に従ふ可し、蓋は撰ばれたる民と約せられたる贖罪主は、イサクより出でん、然れ共、婢の子も亦爾の胤なれば我は之より大なる民を出さん』と。そこでアウラアムは之に従ひ、翌日パンと水を入れた革囊を取りて、アガリの肩に負はせ、當時十七歳許りなる、イズマイルを携へ去らしめました。二人は往き行きて途を失ひ、ウルサウヤ

の曠野に彷徨ひました。既にして飲水盡き果て、咽喉渴き、進退谷まりてイズマイルは死に垂んとしましたから、アガリは我が子の死を目撃するに忍びず、童子を灌木の下に置き、自ら矢の達く程、距ツた處に至り、聲を揚げて、泣き叫び上帝に助けを求めました。所が俄に天より聲がありまして『爾起て童子を扶け起し、手を取りて之を導けよ、我は彼より大なる民を出さん』と仰出されました。アガリは起きて、目を開き、四邊を見ました、所が傍に湧水の井があるのを見ました。往いて革囊に水を充たし、童子に飲ませました。イズマイルも漸く蘇生して元氣

づきました。斯の如く上帝は始終イズマイルの爲にも保護者となられましたからイズマイルは不幸の中にも無事に生長しまして、射を善くし、隣國を伐り従へて、後世廣大なるイズマイル民の先祖となりました。私共は茲に二つの眞理を見出す事が出来ます、一つは上帝様の御約束は、如何なる場合でも必ず成就する事です。御覽なさい、百歳の老人夫婦もいと麗はしい健康な子を生まれました。一つは如何に困難な境遇に陥ツても、活ける眞の信仰がありましたならば、確かに上帝の助けを受ける事が出来ます。御覽なさい、イズマイルは瀕死の危きより免

れました。

十. イサアクの献祭。

公義の上帝、——義人アウラアムに特殊の^{とくしゆ}大恩を垂れ、其子孫を地の諸族中より撰拔し、己の啓示を守護らせ給ふ者——は、天下後世に至り、人々が漫に上帝がアウラアムを愛し給ふた事を非難し、其信仰を疑ひ、或は主の正義公道照管に、疑ひを容るゝ者のあらん事を慮り給ひ、アウラアムが上帝を信ずる信仰に從順の實に萬民に秀てたことを彰はさうと思召して、一日之を左の如く試みら

れました『アウラアムよ爾の愛する獨一子イサアクを携へてモリアの地に往き、我が汝に示す所の山に於て、彼を燔祭に供へよ』と。斯る非常なる命令に出會しても、アウラアムの信仰は、寸毫も亂れず、直ちに主の命令を奉じ、朝夙く起き、一頭の驢馬に鞍を置き、己が二人の僕と、今年漸く十七歳になつた許りの愛少年、イサアクを伴ひ、燔祭の薪を劈いて、モリアの地即ちエーウセイの山地に赴きました、(後世イエルサリムの建てられた所)斯くて旅立ちしてから、一日、二日と経ても、主は未だ燔祭を献ずる場所をお示しになりませんでした。アウラアムの苦心は一通ではあ

りません。家を出てから三日目にアウラアムは特別の徴を蒙りて遙かに燔祭の爲めに定められた大なる山を見ました(此山は後世ソロモン王が聖殿を建立する場所となりました)。因て僕も驢馬を山麓に止め、子イサアクに薪を負はせ、自ら火と刀を執りて、二人偕に山に登りました。途中でイサアクはアウラアムに向ひ『吾が父よ、火と薪は此に在り、燔祭の羔は何處に在るや』と問ひました。アウラアムは答へて『吾が子よ、上帝は自ら燔祭の羔を備へ給ふべし』と申しました。やがて二人は愈定められた場所に登りましたからアウラアムは、茲に祭壇を築き薪を列ね、其子イサアクを縛りて祭壇の薪



太祖アウラアム

の上に載せ自ら刀を執り、手を伸べて將に其子を屠らんとする危機一髪、忽ち天使が天より呼んで『アウラアムよ爾の手を童子の上に擧ぐる勿れ、我は爾が誠に上帝を畏れ、我が爲めに己れの獨一子をも惜ざるを知る』と仰せら

れました。之を聞き従順なるアウラアムは直に其手を止め、其子の縛を解き、目を舉げて回顧みました。所が遙に一匹の牡羊が角を林叢に繋けてをるのを見ました。乃ち之を捕へて其子イサアクの代りに燔祭として献げました。此時復た主の御旨を傳ふる天使の聲が聞えました。「爾は我が爲めに其獨一子を惜まざりしを以て、我は爾を祝福し、爾の後裔を増して、天の星の如く濱の沙の如くならしめん、天下の萬民は爾の裔に因りて祝福せられん、是れ皆爾が我が命を遵奉せしに因るなり」と。斯くてアウラアムは、イサアクと山を下りて、僕等と偕にウイルサ

ワに歸つて其處に住ひました。實にアウラアムの信仰は人心の極致であります、これより以上の信仰はとても人間に見る事が出来ません。即ち己れの獨一子を死に付すといふ事は、如何なる人に取りても、此上なき苦痛であります。然るに之に向つて更に手づから刃を加へんとするものは、固より大悪人、大不義者か、瘋癲、白痴ならばいざ知らず、普通人には到底出来ないものであります。尤も我が國の昔では武士道とか申して父が其子を手打にするといふ事もあつたそうですが、其も何か悪いををした場合に限りません、とても罪なき獨一子を手打にする者はありません。

い。否、世の中で大悪人と云はるゝ人でも我が子を殺すにはなかく、忍びぬと云ふてはありませんか。然るに平素旅人を宿し貧しき者哀れなるものを省みる至極慈悲深いアウラムの事なれば、その心情は如何でありましたらう。なかく一通りや二通りの苦痛ではありませんまい。けれども彼は今上帝の命に遵つて聊かも躊躇せず之を敢て致しました。是れ實に従順に勇氣を兼ねる所の大信仰があつたからであります。此様な立派な信仰は聖なる太祖アウラムでなければとても有ら表はす事が出来ません。アウラムは全く聖書に所謂凡てを上帝に献

げた人』であります。故に神様の命令なれば獨一子を屠りて献祭する事も敢て辞みませんでした。之が爲に太祖アウラムは神様から大なる祝福の御言を戴いた許りでなく、獨一子イサクも彼の死を免れて後世敬虔なる民の先祖となり、上帝の子ハリストスの御先祖となつて普世萬民に卓越した所の恩寵を蒙つたのであります。斯時のアウラムの信仰状態は果して如何で有たかと云ふ事は聰明なる聖使徒パエルの説明する所で明かでありませう。信仰ニ由リテアウラムハ試ミラレテイサクヲ獻ゲタリ、許約ヲ受ケシ者ニシテ、其獨生子ヲ獻ゲタリ、即チ爾

ノ裔ハイサアクニ由リテ稱ヘラレント言ハレシ所ノ者ナリ。蓋シ彼ハ意ヘリ、上帝ハ亦死ヨリ復活セシムルヲ能スト。故ニ之ヲ預象トシテ受ケタリ』(エウレイ十一、十九)。

十一。サルラの埋葬。

太祖アウラアムは其晩年に及んで更にハナアンの南の方に旅行いたしましたが、其家産の大半を占めて居る所の家畜は従前の通りマムレの檜樹の下に置きました。サルラは之を監督して彼處に居たのですが、其年齢が百二十七になつた時、アルバの邑即ち後世へウロンと名づけま

した所に於て永遠の眠に就きました。そこでアウラアムは我が妻の追悼を爲し、鄭重な埋葬を執行はんとして、夜を日に晷ぎて彼の邑に來まして、早速ハナアンの子へトの子孫なる此地の民に、死者を葬るの地を譲らん事を求ました。所でヘット人が答へますには『我儕の中爾の妻の屍を墓地に葬る事を拒むものあらざる可ければ、我等が墓地の中にて最も良き所を撰びて葬り給へ』と申しました。然れどもアウラアムは妻の屍をハナネヤ人の屍と混ざるを好まず、且つ後世不和の事でも起つた際にサルラの墳墓を發掘せられん事を懼れ、其墓地を以て、全く自

分一家の所有と爲さんと欲し、當時ヘット人の(エフロンの)所有に屬してゐたマフベラの洞穴を購はん事を請ひました。エフロンは洞穴のみならず、其四周の地面をも合せて時價四百『シケリ』(我が國の大凡三百二十圓許)の地をアウラアムに譲與いたしました。されどアウラアムは後に其地價を聞き知りて悉く之を支拂ひました。斯の如くにしてアウラアムはマムレの檜樹に相對せるエフロンの田とマフベラの洞穴と其四周の森を得て、其洞穴に我が偕老の妻サルラの屍を厚く葬りました。茲に私共はエフロンのアウラアムに對する親切とアウラ

アムが平生人々の間に愛せられ尊ばれて居たのを見ました。我等が平生人々に愛せられ尊ばるゝが爲には正しい行ひが必要であります。又死は人生の最大事故で誠に悲しむべき事でありますから、之に付ての葬式などには出来るだけ便宜を與へなくてはなりません。然るに世の中には宗教上の憎しみ何かで、却て妨害を與へる輩もなきにしもあらずでしたが、此等は實に往時のヘット人に對して劣る者でありましたやう。

十二。 聖イサクの婚配。

上帝様の 大なる 祝福を 戴いた 所の アウラムは、もはや 百四十歳と なりました。それで 段々 自分の 老衰を 感じて 來ましたから、早く 我子 イサクに、嫁を 貰ふて 遣て 安心 したいと 思ひました。其に ついて ハナアン人の 女を 貰ふ だけでは 好みませんでした。其れは ハナアン人が 眞の 上帝 を 忘れ、痛く 悪風に 染ツてゐた からで あります。時に イサクの 年は 四十で ありました。聖 アウラムは 永年來、家 の 全業を 管理させて ゐて 最も 信任する 老僕(エリエゼル)



を 招きて 之に 謂ひまし た『爾は 我が 故土に 往 き 彼處より 我子 イサク の 爲に 妻を 娶り 來 ることを 誓へよ』と。何事 にも 主人の 命を 能く 遵 奉して 背いた事 のない 老僕は 直ちに 誓を 發し て 旅路に 上るの 支度を 爲しました。其頃も 新郎

は新婦の兩親に品物を贈る風がありました、之を結納と申して、彼等の家の富めるに貧しいに因て種々區別がありまして。アウラムの僕は結納の爲めに種々な貴い品を選びまして之を十頭の駱駝に積んで、アウラムの兄なるナホルの住んでをるハルランの市を指して赴きました。やがて老僕は市に近づき、井の傍に駱駝を繋ぎ、長き旅路の疲勞を憩ませました。時に夕陽西山に春く頃で此邑の童女等が晩食の支度何かの用意で、此井に集ひ來て水を汲む頃でありました。老僕は己が責任の重大なるを感じまして一心に全能の上帝を恃み、心中に祈禱

して『我主人アウラムの上帝よ、矜恤を彼に垂れ給へ。視よ、我は井の傍に立ち、邑人の女、水を此處に汲まん、我は其中の童女に向つて、請ふ、爾の瓶を傾けて、我に飲ませしめよと言はん、彼が甕に水を我に飲ましむるのみならず我が駱駝にも飲ませしめんと言はん、彼は誠にイサアクの爲めに、上帝の定め給ひし妻ならん』と。老僕の祈禱が終るや終らざるに、其處に一人肩に瓶を戴せた美しい處女が來まして、井に降りて瓶に水を汲て、還らんと致しましたから、老僕は趨り迎へて、求めました『請ふ我をして爾の瓶より少許の水を飲ませしめよ』と。斯く申しますと、彼

女は答へて『サア、君よ、お飲み下さう』と申しまして、直に瓶を肩よりおろして飲ませ、其飲み畢るのを待つて、私には又、爾の駱駝にも充分に飲ませてあげまじやうと申しまして、再び井に降り、駱駝の爲めに水桶に一杯水を汲み、彼らの飽足るまで飲ませました。老僕は之を奇とし、黙然としてしばし處女の爲す所を熟視て居りましたが、心竊かに以爲ました『主は斯く速かに我が祈禱を聞き納れて下さったのだらうか』。それから老僕は處女に向つて『爾は誰の御女様ですか』と問ひ、重ねて『我は旅人なり、今や日は暮れて、今夕の宿舎もなし、爾の家に我等の泊る隙地

ありや』と伺ひました。處女は答へて申しました『我はナホルの子ワフィルの女レウエカと云ふ者なり、我が家には藁も芻草も多くありて、且つ宿る隙地もあり』と。そこでアウラムの僕は、膝を屈めて、主が己れの祈り求めた通り、行ひ給ふたことを感謝して『我を我が主人の親戚に導き給ふ主は讚揚せらるべし』と申して、當時彼の國の婦人が鼻孔に穿てる、重さ半『シクリ』(五分と云ふ)の金の鼻環と十『シクリ』(十匁と云ふ)の金の手釧二箇とを取りてレウエカに與へました。處女なるレウエカは、其人がアウラムの僕であることを知り、急ぎ走つて之を其家人に

告げました。それで其兄のラワンは直に趨つて其處に來て、老僕と駱駝が井の傍に立つてをるのを見まして、聲を懸け『上帝の祝福を被りし者や、請ふ、我が家に入れ、何爲ぞ外に立つや、我は既に爾の爲めに小室を設け、駱駝の爲めに其居を備へたり』と申しました。そこで老僕は伴はれて家に入りました。ラワンは、駱駝の荷を解き、藁と芻草を之に予へ、又水を持って來て客の足を濯はせ、それから夕食を侑めました。けれどもアウラムの僕は端然として容を改め、ラワンに謂ひました『我は我が來意を述べ、我が主人の使命を果さざる内は、何物をも食はず』と。

それではとラワンは速かに之を話すを促しました。老僕は、已が此地に來た理由と祈禱に由りて主が斯の處女をイサクの妻となす可き事を示し給へることなど詳しく物語りて『爾等は我が主人に恵みを施し、レウエカを與ふる心あるや否やを我に告げよ』と申して、其言葉を結びました。ラワンもワフィルも齊しく『是れ皆主の旨より出でたり、我等の抗言ふ可き事にあらず、視よ、レウエカは爾の前にあり、之を伴ひ往け、彼は主の定め給ひし如く爾が主人の子の妻たるべし』と答へました。之を聞いた老僕の悦びは譬ふるに物なく、地に俯伏して聖恩の

優渥なるを 感謝し、此處に 携へ來れる 金銀の 器物、麗はし
 き衣服などを 取揃へまして、レウエカに 與へ、又其兄と母
 親戚に至るまで 残らず 澤山の 進物を 贈りました。それか
 ら從者と 偕に 饗應を 受けた 後其處に 泊つて 休みまし
 た。翌朝、アウラムの 老僕は もはや 首尾よく 己が 使命
 を達したのですから 別に 逗留するの 要もなし『請ふ之よ
 り 歸途に 就く可し』と 申しましたが、ラワンも、レウエカの
 母も 其餘り 早いのに 驚いて『尙十日間 ぐらゐは、女と偕
 に此に 居ても よいでしやう』と 請ひました。老僕は 肯はず
 して 答へますには『爾等 我を 沮む 勿れ、主は 我が 道を 祝



女祖アウラム

福し給へり、我は 早く 我
 が 主人に 知らしめん』と
 申しました。兩親も 今は
 留立て することも 出来
 ず、娘 レウエカを 呼んで
 『此人と 偕に 往くを 願
 ふや 否や』を尋ねました。
 レウエカは『往きます』と
 申しましたから、厚く之
 を 祝福して『レウエカへ、

爾より億兆の民は生れん、而して爾の後裔は敵國を領せん』と申しまして、之に乳媪と侍婢を同伴せしめ、アウラムの僕と偕に出發させました。

當時、イサアクは、南の方なる一つの場所、其はアガリが曾てその子イズマイルと偕にサルラの許を遁れて、飢渴に迫つた時上帝から佑られた所の活水の井(原名はベエルラ)の傍に居りましたが、或日の晩方田畠の間を黙想しつつ、そゞろ歩きしてゐました時、忽ち駱駝の來るのを見ゆして彼等を途中まで出迎へました。レウエカも、之を見て急いで駱駝から下りて、『彼方より來る人の誰れなるや』を老僕

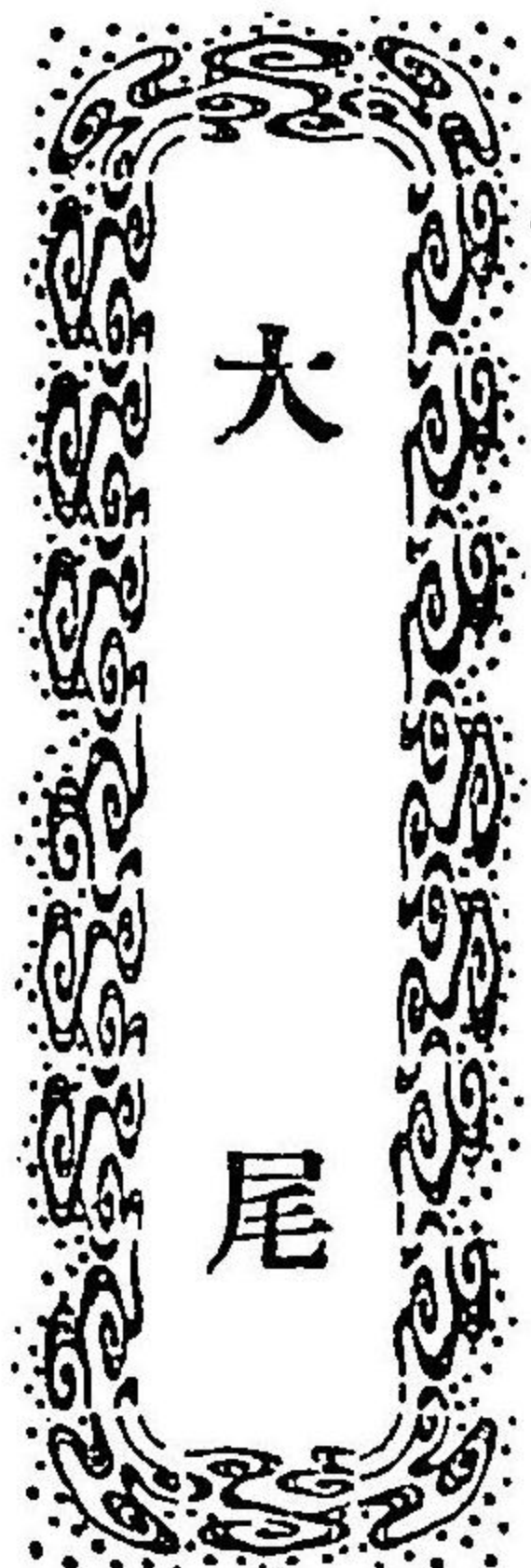
に問ひました。而して『彼は我が主人の子イサアクなり』と聞きましたから、レウエカは甫めて自分の新郎を見まして、幃衣を取りて身を蔽ひました。是は彼の地方で貞潔を表す往古の風俗でありました。斯くて老僕は其有りし事を悉くイサアクに語りましたから、イサアクも此上なく打悦び、直ちにレウエカを其母の帳幕、曾て眠つたサルラが居た所の室に導いて、之を自分の妻と致し、茲に芽出度婚禮の筵が首尾善く相濟みました。

十三。 アウラアムの眠り、

太祖アウラアムは(先妻の死後、フエットラと云ふ後妻を)嫡子イサクに、世にも稀なる至良婦を得たのを此上なく悦び、其晩年を楽しく送りましたが、既に百七十五歳の高齡に達した時、終に永久の眠に就きました。そこで嫡子のイサクと庶子のイズマイルは、嘗て其母サルラを葬つた所の彼のマフベラの洞穴に厚く之を葬りました。時にハリストス降生前一千九百二十九年でした。正教會は斯の義なる太祖聖アウラアムの記念を十月の二十二日に定めて

をります。

願はくは我等小信の者も、彼れ聖太祖の大なる信仰と從順に則り、且つ彼れの方ある祈禱に依て、此世にも神靈的アウラアムの子と稱せられ、後の世にも我等の靈魂がアウラアムの懷に置かるゝを得んを(ルカ十六)アミン。



264
195

